

第2回京都市未来共創チーム会議
議事録

日 時：令和6年11月11日（月）12：10～13：00

会 場：京都芸術センター2階 「講堂」

出席者：

安野 貴博	合同会社機械経営CEO / AIエンジニア / 起業家 / SF作家
池坊 専宗	華道家・写真家
伊住 禮次郎	茶道総合資料館副館長
大井 葉月	京都市職員（東山区役所）
大竹 莉瑚	市民公募委員
杉田 真理子	一般社団法人 for Cities 共同代表 / 都市デザイナー
田口 成人	京都市職員（環境政策局）
都地 耕喜	EVER 株式会社 代表取締役
三川 夏代	株式会社メルカリ 『mercari R4D』

以上9名
(五十音順、敬称略)

1 開会

2 議事

(1) 第2回京都市総合計画審議会での審議を踏まえた京都のめざすまちの姿等に関する議論

司会

この会議の目的は大きく2点ある。1つ目は、2050年に目指す姿の実現に向けて、新たに京都の未来に付け加えるべき価値観や視点を議論することである。先ほどの第2回審議会における議論を踏まえ、未来共創チーム会議として重要だと思うキーワード、もしくは、新しく付け加えたい視点等を議論していきたい。

もう1つは、第1回未来共創チーム会議において、京都独自の価値観や強み、京都らしさについて議論したが、今回の議論を踏まえ、増やしたい部分や変えていきたい部分を議論することである。

第1回未来共創チーム会議では、都地委員が欠席だったため、都地委員から今日の議論を踏まえて、京都市民が愛し、世界の人に誇りと憧れをもってもらうまちとなるために必要なこととお話しいただきたい。これまでにしているものでも、出ていないものでも構わない。

都地委員

先ほどの議論の中で、近代と現代の融合が非常に興味深いと思っている。今を生活している私たちが、例えば100年後や150年後に令和の文化と呼べる何かをつくれるだろうかと考えた時に、過去のを踏襲したり、保護したりしていくことも重要ではあるが、現在の京都にあるリソースや新しい価値観において、どのようなものを生み出したり、デザインしたりできるかをもっと深掘りしていくと、今残っている文化的なものを、意図して2024年まで残しているというより、その概念も含めて本当に大切にしてきたからこそ、今も残り続けているものだと思う。そのため、今を生きる私たちは、今あるリソースを使って、どういったものをデザインして、残し続けていくことができるかを、きちんと深掘りしていきたい。

司会

都地委員自身が2050年に向けて、大切にすべきこと、残すべきと思うことはあるか。

都地委員

あくまで主観であるが、現在の京都は保護に力を入れている印象がある。すべて一括りに残そうとするのではなく、定数であり続けるべきところは定数のまま残し、変数として変わり続けなくてはいけないところは変わり続けていく。そういった境界をしっかりと考え、見極めていきたい。

司会

保護するだけでなく、活用することで新たな価値をつくれるのではないかという意味か。

都地委員

そうである。あくまで私たちも時代をつくっている人間の一人である。

司会

今日の議論を聞いて、印象的だったことや強調したいと思うことはあるか。

池坊委員

印象に残っていることが2点ある。1つは、安野委員や三川委員の経験を聞いて思ったことだが、アメリカの大統領選挙や日本の全体を見ても、今後分断がますます進んでいくのだろうと思う。今まで当然のように残ってきたものがどんどん消えていく流れがある中で、できることなら全部残したいが、どこを完全に守り抜くかというコアの部分をしっかり意識していく方が現実的ではないか。切り捨てるというと聞こえは悪いが、変わっていく部分とここだけは死守するという濃淡をつけていくことが重要ではないだろうか。

もう一つは、町内会ができた当時とは前提条件が異なり、夫婦やパートナーの世帯、子どもや孫がいる世帯など世帯構成が多様化したり、年代にかかわらず単身世帯が増えたりしていく中で、町内会と行政が連携し、単身世帯や外国籍の人なども含めて積極的なフォローができるような体制づくりが必須ではないかということである。

現在は1人で生きていける時代になってきているが、必ず揺り戻しが来るとしており、見回りや声かけなどのフォローが、治安の維持や健康寿命を延ばすという意味でも、重要性が増すはずである。もう少し能動的に負担を分散できるように、地域コミュニティの再構築が重要であると改めて思った。

司会

大井委員はいかがか。

大井委員

私のいたグループでは観光の話題が出ていた。観光客に対して、ネガティブなイメージ持っていたり、地元との関係で受け入れられなかったりする部分はあると思うが、拒否するばかりではなく、受け入れる体制をつくることができないかと考えた時に、京都のルールや心構えなどが必要となってくる。そしてそれは、観光客に向けてだけではなく、我々のようにこれからの京都を考えていく若い世代にも広がるとよいのではないだろうか。

司会

伊住委員はいかがか。

伊住委員

都地委員から保護と活用の話があったが、私も普段は美術館で、資料の保存と展示などの活用という相反することを、どうすれば両立できるかということに常に考えている。私は積極的に活用していくべきという意見である。理由は、実際に使う人がいなくなり、その物について分からなくなると、どうしても保護する方向に傾いてしまい、実際に使えないものになると、メンテナンスも行き届かなくなってしまうからである。

先ほどのテーブルでも出ていた話で、例えばこの茶室を残そうとなると、茶室の部分だけを保存するという感覚はあるが、その周辺は取り壊されてしまう。そうすると台所がない料理屋のようなもので、後ろで料理を作れないなど、できないことが多くなり、遺跡になってしまう。それはすごく残念なことで、実際に京都市内にある茶室でも、炭が使えず、料理も指定のお弁当しか使えないなど制約が厳しいと、利用者がいなくなり、鑑賞する場所としてしか機能しなくなる。活用のための緩和は絶対的に必要なのではないだろうか。

どうしても保護の部分に目が向きやすく、活用という観点ではハードルだけが高くなっている。一度できたハードルはあまり下がらないので、新しいハードルだけが増えていき、使う人がいなくなっていくと、アクティブさが失われていく。そうすると保存に意識を向ける人も少なくなっていくという、悲しい連鎖になるので、活用面での意識ももう少し京都市として持つべきポイントかと思う。遺跡として残すという考え方ももちろん重要だが、お茶も含めて文化は常に生きているものであるから、緩やかに全体として動いているところ、文化が生きているのだというところをきちんと捉えて、茶室は活用する担い手、文化と共に在るのだという考え方をした方がよい。

先ほどの議論の中で、杉田委員のお話が印象的であった。ベストのものを100%完璧に保存するという考え方があり、それ以外はなかなか許されない状況にあるが、杉田委員から、ベストを1残すということとともにベターなものを10残していくことが、京都にはすごく重要ではないかという御意見があった。私はそのあたりをもう少し掘り下げて考えたい。

2050年に付加すべき価値観という話で、先ほどもう少し議論したいと言っていたのは、環境に関する話である。京都議定書をわれわれが実践していく際には、アクションプランなども含めて、しっかり整えていくことが重要ではないかと考えているので、もう少し議論していきたい。

保存と活用に関して言うと、活用する人が増えると、必然的に保存にも目が向くと思うので、両立する可能性は十分あると考える。

司会

杉田委員はいかがか。

杉田委員

私からは2点ある。1つ目は、若者と政治の距離についてである。先ほどの審議会委員との合同での議論は、とても刺激的で面白かった一方で、正直不安になる場面もいくつかあった。そもそも今回の未来共創チーム会議という、いわゆる若者のチームとベテランの

方々の審議会で分かれて、それぞれが報告しつつ、今回のように一堂に集まって話していないという前提に対して、これで良かったのかと疑問に思った。

最後に宗田会長から、若い世代と話すことが全然ないと強調されていたが、政治の場において、そういった場がないというのは相当問題であり、緊急度を持って解決すべきことである。今日の議論の中でも、意見の相違や、前提として活動している領域や世界観が異なる部分はどうしてもあるが、これはディスカッションの中でしか解決しない。

例えば、私のいたテーブルでは、京都は西洋化、近代化の上でできたまちで、それを誇りに思うべきだという意見があった。一方で、私たちの世代は別に西洋化を良しとしているわけではなく、より古いものや、この地域や日本ならではの文化や伝統に回帰している世代であると思っている。若い世代といっても、恐らくここにいる方々は30代が主で、10代や20代はどこにいるのだろうか、ディスカッションの場における若い世代とその他という分け方に、とても違和感を覚えた。

そういう意味では、議論におけるダイバーシティの大切さを改めて見返す必要がある。今回の資料の中でも、女性委員がピンクでハイライトされているのも少し違和感がある。政治の場におけるダイバーシティを改めて話し合うということが大切である。

もう一つは、京都の未来を考える上で、京都だけではなく、世界についても考える必要があると改めて思った。私のいたテーブルでは、どうしても観光の話が多くなり、全体の議論の40%程度を占めていた。京都のオーバーツーリズムをどうするかということだけを考えると、どうしても局所的な議論になってしまう。オーバーツーリズムは世界的に見ても、新自由主義的な経済活動の中でグローバルフットプリントなどを考えても課題である。私自身も第1回未来共創チーム会議で話したサステナビリティやリジェネラティブなど、人間以外の環境や生態系も含めたディスカッションが、今回少し足りなかったという反省点がある。京都の未来を考える上で、グローバルな社会意義や社会課題にも目を向けられるとよいのではないか。

司会

大竹委員はいかがか。

大竹委員

私のいたテーブルでは、余白やその言葉を言い換えて、遊びというキーワードが出てきて、印象的であった。京都には伝統と革新があったり、内と外、自分と自分以外の視点でできた文化であったり、一見相反するようなものをうまく織り交ぜながら共存させる両極性が特徴としてあるのではないだろうか。その両極を行き来する中で、余白や遊びというものも生まれる。どこまで許容するのか、受け入れていくのかを、その時々の関係性の中から自分たちで決めて、それがさらに変容していくことが、京都らしさになっていくのかと感じた。

私たちは「らしさ」というのをとても意識している。それは京都らしさだけでなく、個人においても自分らしさとは何かを考える時代のように思う。私自身、自分らしさが分からず休学しているが、らしさを求めてしまうのは、失われつつあるからこそであると思う

ので、グローバル化や流動性が進み、似たような都市や同じような人たちがたくさんいる中で、自分自身やこの町にしかないものは何か、再度アイデンティティーを探し求めている時代ではないか。

一方で、価値は多様化しており、らしさを定義することにも難しさを感じる。大きな単位で方向性を決めていくよりも、私のいたテーブルで出た「小さなリーダー」という言葉があるが、それぞれのコミュニティや共感の下でつながる関係性の中で、小さい単位でそれぞれの価値観が出来上がって、それをまたつなぎ合わせるハブとなるものや人がいると良い町の姿であると思う。

司会

田口委員はいかがか。

田口委員

私も2点ある。これまでに出た保護の話や、必要なことは何かという議論にも関連することである。何を残すか、何をつくっていくかという時に、小川委員は、全部しようとするところも同じ都市になるので、優先順位を決めなければいけないという話をされていた。その時に大竹委員がおっしゃっていたことで一番印象深かったことが、洛西地域でまちづくりに関わるようになった時に、自分たちがまちづくりでやろうとしていることを、地域の年配の方々が、少し形は違うかもしれないが、既に30年も前からやっていて、「もう実はそこにあったのだ」と思ったという話である。この「実はそこにあった」ということが非常に重要ではないだろうか。

これは、らしさをどう捉えるかということにも関わるが、「らしさ」とは、後から見たときに再帰的に見つけることでしかわからないものではないかと考えると、自分たちがどうあるべきかを考えるヒントになるのではないか。あるいは無計画を計画するということも大竹委員がおっしゃっていたが、無計画の中で、とはいえ方針を取らなければいけない時に、「実はここにあるのだ」という感覚が指針になるのではないかと思う。

もう一つは、近代・西洋化に関連して、宗田会長はコスモポリタンとおっしゃっていたが、この考え方をどう更新するかも重要だと正直思った。コスモポリタンが、いわゆる境界がないのだという考え方だとすると、25年前と今で一番違う点が、それにある種の限界が来ていることではないかと、今回のアメリカ大統領選挙などを見ていて思う。境界を設けつつ出入りを制御する一見さんお断りの話が私のいたチームではあったが、京都はそういう制御の技術を持っているのではないだろうか。今の時代にそういうことを言うのは非常に難しいが、境界の重要性と、それを制御する平等や公平性のあり方のアップデートが理念的にできると、非常に面白いのではないか。

司会

安野委員はいかがか。

安野委員

私からも3点、これまでの話も踏まえつつお話ししたい。まず1点目は杉田委員が先ほどおっしゃっていた、この場のディスカッションの仕方にそもそも問題があるのではないかという話の延長線上である。世代間の対話が少ないということももちろんそうだが、付け加えるとすると、ここにいる20代、30代の方も非常に偏っている。皆さんは素晴らしい経歴をお持ちで、非常に社会的な立場もある方々ばかりで、そういった方が集まって議論することは素晴らしい。一方で、まちの未来を考える時に、これまでの話を聞いていても、建設的な議論ばかりでよいことではあるが、それはそれで偏りを感じたのも事実である。

例えば、先ほどの観光の議論で、観光客がものすごく嫌いだから入ってこないでほしいという意見はそれほど出なかった。オーバーツーリズムの話はもちろん課題だが、受け入れていかなければならないという方しかいなかった。

このメンバーにどこまで代表性があるのかということに関しては、自覚的に話を進めていくとよいと思う。もう少し感情的な意見など、多様な意見が世の中にはあると思うので、そういった意見も拾い上げていけるような進め方ができるとよいのではないかと。皆さんが悪いとか良いとか言っているわけではないので、そこは誤解しないでいただきたい。

杉田委員

怒鳴り合いなどをしながら意見交換してもよいくらいである。

安野委員

その通りで、怒鳴り合いになってもおかしくないような議論をしているはずだが、建設的に議論が進んでいるので、それ自体にバイアスがあるということは自覚的であった方がよい。それが1つ目の話である。

2つ目は、住んでいる人にとって京都を良いまちにするという意見が多いが、住人をどう捉えるかということも非常に難しい問題になってきている。そもそもまちに住んでいるという状況自体が、この先25年間で、よりいろいろな状態を指すようになっていく。今であれば、二拠点生活をしている方も多し、1年に1か月程度は京都で過ごす人や、あるいは人生の中において、大学の4年間だけ京都で過ごす人もいる。世界には京都に行きたくて仕方ない、人生で1度は行きたいという人もいる。どこまでを住民として拾い上げていくかは、もう少し議論してもよいのではないかと。住民にとって良いまちという議論をしている時に、その住民はどういうところを指すのだろうかという議論があった方がよいという意味である。非常に広くステークホルダーを捉える方法もあれば、非常に狭く捉える方法もある。それは価値観次第である。

3つ目は、どの辺りまで住民として捉えるのかということとも関係するが、個人的な願望として、京都市は他の日本の町とは違うまちであってほしいということである。これは私が元々スタートアップの経営をしていたから、そのように思うところが大きいですが、差別化、他と違うユニークさを持つとすることが非常に重要である。これは会社経営にとっても、まちづくりにおいても、重要性が増している概念である。京都市は他のまちと圧倒

的に違う差別化をできるポテンシャルがあるまちなので、何となく平均的な意見に寄せていくと、他の日本のまちと同じようなポリシーを持って、同じようにまちづくりをするようになる。ある程度、差別化を意識する、差別化をしようという合意を取ることが重要である。

司会

三川委員はいかがか。

三川委員

議論を経て、2050年にも京都市民が愛し、世界の人に誇りと憧れをもってもらうまちとなるために必要なことは何かという、この問い自体がかなり複雑だと改めて思った。もう少しこの問いを分解してもよいのではないか。例えば「京都市民が愛し」というところも、先ほど安野委員が指摘したとおりに、京都市民は結局どこまで含まれるのか。「愛する」も動詞なので、何か行動や態度を示すということだと思うが、愛する状態はどういうことをすると満たされるのかなどについても、今日の議論を回収しながら、きちんと私たちの中で合意形成していかなければいけない。

さらに「誇りと憧れをもってもらう」という部分についても、それらを持ってもらって、それをどうしてほしいのかも重要。どのような時に世界中の人に「京都っていいよね」と思ってもらいたいのかという状態についても、もう少し想像力を働かせながら議論する必要があると改めて感じた。

池坊委員

私は、大竹委員の指摘が非常に深いと思った。今はSNSが流行ったり、いろいろな情報に流されたりして、自分の生活や政治行動を、自信を持って決められない時代になっている。そんな中で、新しく再発見していくことが、らしさの定義につながっていくという田口委員の話を聞いていると、京都といろいろな市民や関係者との関わりを多層的に、一度きりで終わるのではなく、学生時代に京都で過ごし、また年を重ねて戻ってくるなど、いろいろな京都との関係性がある中で、行くたびに新しい京都を発見する。新しい京都を発見したり、触れたりするということは、新しい自分を再発見したり、自分自身の変化につながったり、それが自分の再定義にもつながっていくと思う。だから自分自身がどういう人間かということを手勝手に上から決めても、そうではないと思ったりするように、無理やり京都らしさをつくったり、自分らしさを決定したりするよりは、次々に新しい側面や、関係性が見えてくるようなまちだと、結果として京都のらしさが深まり、あるいはそこに生きる京都市民のロイヤリティーというか、京都に対する愛情が深まっていくのではないだろうか。

杉田委員

私からも1点追加で話をさせていただく。第1回共創チームの議論の中で0.1市民という言葉が強く印象に残っている。先ほどの安野委員の、誰が京都市民なのかという問い

にもつながってくるが、例えば、3日過ごしたら京都市民の一員になるというか、0.1や0.2市民になるという考え方があってもよいのではないか。京都の良さは関係人口が圧倒的に多いことで、それは観光客も含まれる。彼らにそういった市民としてのプライドを、たとえ0.1%でも持ってもらうことで、開ける地平があるのではないか。

生態系や環境についての話を繰り返すが、そこにも関連する部分があると思っている。例えば、どこかは覚えていないが、川にも市民権を渡したという実験的な取組を行った自治体があった。川にも権利があるので、勝手に汚してはいけないとか、勝手に領域を侵犯してはいけないという話になっていく。前回の議論でも、例えば微生物にも京都に住んでいるという市民権があるのではないかとか、そういった人間以外の生物に対する視点も、この0.1市民という考え方から生まれてくる。

司会

時間が来たので、ここまでとさせていただきます。最後に西田都市経営戦略監からお話しいただきたい。お願いします。

西田都市経営戦略監

改めて本日は皆さん、長時間にわたり議論していただき感謝申し上げます。皆さんの話を聞いて、改めて対話が重要であると思った。杉田委員や安野委員から御意見を頂戴したが、どういう場の持ち方をするかということについて、なかなか明確な答えはないが、われわれ行政がこれからプラットフォームビルダーとして政策を進めていく上で、このような対話の場をつくっていくことが大きな仕事になっていく。その時の大きな命題として、今後肝に銘じて、どういう工夫ができるか模索していきたい。

また、本日の議論を踏まえ、今後の議論の進め方を検討していくが、最終的には、京都において大切にしたいものをまとめていただく作業になっていく。引き続き、皆さんと熱い対話をしていきたいので、よろしくお願いします。

司会

それではこれにて閉会とする。

(2) 事務連絡

3 閉会